ヨハネによる福音書 10:1-21；「善き羊飼いとその羊たち」——2026年10月25日

I. ようこそ

A. おはよう！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。皆さんとここにいることができて嬉しい。天気が悪かったにもかかわらず、主であり救い主である神を賛美し礼拝するために、皆さんが来てくださったことを嬉しく思う。

1. *初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている方々も、ようこそ。*

B. 小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出す前に、数分間、オルドネス・パナマー一家のために祈りたい。

1. ジョセフとニヤはここ岩国で出会い、結婚に至った。そして今、二人は新たな冒険と人生の季節へと旅立とうとしている。二人の成長を見守り、神が二人を御自身のもとに引き寄せるためになされているすべての御業を思うことは、大きな祝福だった。

2. 二人は米国へ赴く予定だ。私たちは彼らのために祈り、神の絶え間ない祝福と、彼らの人生への導きと導きが与えられ、この次の季節が主の絶え間ない臨在に彩られるものとなるよう願いたい。

3. ジョセフとニヤ、お二人は今の場所に立っていてほしい。教会の指導者たちや、お二人に最も近い人たちに、勇気を持ってお二人の周りに集まり、祈りながら手を置いてほしい。（*祈り*）

C. 皆が席に戻る間に、小学生の子供たちも日曜学校の教室へ送り出そう。

D. 今朝は、ヨハネの福音書の節ごとの学びを続ける。

1. 先週は第9章を終え、「見る目」と題した2回にわたるメッセージを締めくくった。今朝の聖句は、その物語の続きから始まる。イエスは、盲目の物乞いとパリサイ人たちの間に起きた出来事を背景に、ある種のたとえ話を教えているのだ。

2. さて、ヨハネは他の福音書記者たちとは異なる方法で福音の記録を提示している。マタイ、マルコ、ルカとは異なり、ヨハネはイエスの伝統的なたとえ話をあまり多く記録していない。

a. 彼は「種まきのたとえ」「放蕩息子のたとえ」「タラントのたとえ」「赦さない僕」といったたとえ話を記録していない。それらをわざわざ盛り込むことはしなかったのだ。

b. しかし、今日の聖書箇所には、数少ない例外の一つがある。ヨハネは、盲人が目を見開かされた出来事と、その男が真理を語り、イエスへの信仰を表明したために、ファリサイ派の人々によって共同体から追放され、破門されてしまった事件の後、イエスが語ったある種のたとえ話を実際に記録しているのだ。

3. 今朝の聖書箇所は、ヨハネによる福音書第10章1節から21節だ。そして、メモを取るのを好む方々のために、今回の学びのタイトルは**「善き羊飼いとその羊」**とする。

4. まだ開いていない方は、聖書を開き、ヨハネによる福音書第10章に目を通してほしい。

a. 今朝、聖書を借りる必要がある方は、周囲の椅子の下に置かれている聖書の中から、一つ手に取って借りることをお勧めする。

b. 私たちが聖書を読み進めていく中で、単に私の言葉を鵜呑みにするのではなく、皆さんがご自身で御言葉を読めることが重要だと考えている。

5. 聖書を開き、第10章に目を通したら、神と御言葉に敬意を表して、立ち上がってほしい。私は自分の聖書から本文全体を読み上げるので、各自の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

6. 愛弟子ヨハネは、第10章1節で、キリストの生涯についての物語を次のように続けている……（R & P）

II. 復習と概要；

A. 今朝の箇所は、第9章の出来事の直後から始まる。

1. 第9章では、イエスは、自分を神だと称したとして石打ちにしようとした宗教指導者たちから逃れていた。群衆の中を通り抜け、神殿を出たとき、イエスは道端で盲目の物乞いに遭遇した。

2. イエスは彼に目を留めた。彼はその男に心を引かれ、その男の事情をすべて知っていた。この男が生まれつき盲目で、一度も日の光を見たことがないことを知っていたのだ。

3. 弟子たちは、この男を教えの機会として利用しようと、イエスに「彼が生まれつき盲目なのは、両親の罪のせいなのか、それとも本人の罪のせいなのか」と尋ねた。

4. イエスは彼らの誤った神学を正し、これは罪の問題ではなく、神がこの男の中に、そしてこの男を通してご自身を現すための機会であると告げた。

5. それからイエスは地面に唾を吐き、土で泥を作り、その泥を盲目の物乞いの目に塗った。そして、シロアムの池に行って顔を洗うよう彼に命じた。

6. 男はその通りにし、目から泥を洗い流すと、奇跡が起こり、生まれつき目が見えなかったその男は、突然見えるようになった。

7. その場は大いに騒然となった。かつては目が見えなかったこの男が、今では完全に癒やされ、初めてあらゆるものを見て、近所を歩き回っていることについて、誰もが話題にしていたのだ。

8. 人々はこれをどう受け止めてよいのか分からなかったため、その男をパリサイ人のところへ連れて行き、この状況について判断を仰いだ。つまり、この男が神による真の奇跡の受益者であるかどうかを確認するためだ。

9. パリサイ人たちは詳細を把握しようとその男に質問したが、その詳細が導く明らかな結論を受け入れようとはしなかった。

a. その出来事を神による真の奇跡として認める代わりに、彼らは「そもそもその男は最初から盲目ではなかった」と主張し、癒やしの正当性を否定しようとした。

i. 彼が「目が見えない」状態ではなかったと断言する術はなかったため、彼らにとって次善の策は、彼がそもそも本当に盲目ではなかったと主張することだった。

b. そこで彼らは、その盲人の両親を呼び出し、尋問した。

i. しかし、両親は他の多くのユダヤ人と同様、宗教指導者たちを恐れていた。というのも、宗教指導者たちはすでに、もし誰かがイエスをメシアだと主張しようものなら、その者を宗教集会から破門し、共同体から追放すると決めていたからだ。

ii. そこで両親は、その男が自分の息子であり、生まれつき盲目であったことは証言したが、ユダヤ人たちを恐れていたため、どのようにして癒やされたのか、あるいは誰が癒やしたのかについては語らなかった。

iii. そこで両親は、その男は成人しており、自分で話すことができるのだから、宗教指導者たちは彼本人に尋ねるべきだと伝えた。

c. 彼らはかつて盲目だった男を再び呼び戻し、この一件がすべて大がかりな偽りであり、イエスが実際に彼を癒したわけではないと証言させようと、さらに尋問を重ねた。

d. しかし、かつて盲目だった物乞いは、脅しには屈しなかった。証言を変えるどころか、むしろその主張をさらに強め、唯一論理的かつ合理的な説明は、イエスが確かに神から遣わされた者であり、かつてない奇跡を行うことができたということだと主張した。

i. 彼は、世が始まって以来、生まれつき目の見えない者の目を開くことのできる者がいたなどという話は聞いたことがなかったと証言した。それにもかかわらず、イエスはまさにそれを成し遂げたのだ。

e. そして、その証言ゆえに、パリサイ人たちは彼を追い出すことに決めた。彼らは彼を宗教集会から破門し、あらゆる宗教儀式や礼拝への参加を禁じた。

f. その男が追放されたと聞いたイエスは、彼を探し出し、見つけると、神の子を信じるかどうか尋ねた。

g. その男は要するに、「その方がどなたか教えてほしい。そうすれば信じられる」と言った。そしてイエスは、かつて盲目だったこの物乞いにご自身を現し、彼を自分の仲間として迎え入れた。

B. この章の内容は、おおむねそのような流れだった。そしてイエスは、この状況から、羊飼い、羊小屋、そしてさまざまな羊の群れに関するある種のとことばを語る機会を得た。

C. 私はあえて、この箇所を三つの主要なセクションに分けてみた。

1. その第一は1〜6節にあり、「**<u>イエスによるたとえ</u>**」が語られている。冒頭の節をもう一度見てみよう。

III. ヨハネ10:1-6；イエスによるたとえ話

A. 目の前の状況に応えて、イエスは口を開き、羊、羊小屋、群れ、羊飼いなどについてのたとえ話を語った。

1. 当時の人々は、非常に農業中心の社会に生きていた。彼らは羊や羊飼いのことについて、すべて熟知していたのだ。

2. 実際、その歴史を通じて、イスラエルの民と土地は、羊や羊飼い、そして羊の群れの世話と密接に関わってきた。それは大多数の人々にとって、ごく当たり前の生活様式だった。

a. イスラエル人の歴史を振り返ると、羊飼いと関わりの深い重要な人物が数多くいた。アベルは羊の群れの羊飼いだった。父アブラハムも羊飼いであり、その息子イサクや孫のヤコブも同様だった。さらには、その曾孫であるイスラエルの子ら、すなわちヤコブの息子たちも、羊飼いとして知られていた。

b. モーセは羊飼いであり、預言者アモスも羊飼いだった。そしてもちろん、ダビデ王は史上最も有名な羊飼いのひとりである。

c. 羊飼いであることは、彼らにとって生き方そのものだった。だから、イエスが羊飼いと羊について語る時、それは彼らの言葉で語っているのだ。

i. それは、ウェストバージニア州の人々が炭鉱について語ったり、テキサス州の人々が牧場経営について語ったり、ハワイの人々がサーフィンや海について語ったりするようなものだ。

ii. まるで大阪の人々が繊維産業について語ったり、横浜の人々が海洋工学や造船について語ったりするようなものだ。それが彼らの代名詞であり、その地域出身者のほとんど全員が、それらの特定の分野について何らかの知識を持っている。

iii. 今でもイスラエルを旅行すれば、野原で羊の群れを世話する羊飼いの姿を見ることができる。

3. そこで、イエスはそこにいる誰もが馴染みのある用語や言葉を用いて、たとえ話を教えたのだ。

B. 6節では、これが「例え」であったと記されている。「例え」を意味する言葉は「パロイミア」（paroimia）である。これは共観福音書の「たとえ話」に使われている言葉と厳密には同じではないが、語源は共通しており、基本的には「たとえ話」と同義である。

1. そして、たとえ話について重要なことの一つは、それらが天の真理を伝える地上の物語であることを理解することだ。

2. ここでは、物語というよりは、羊飼いの仕事に関連する様々な事柄の描写である。しかし、それでもなお、霊的な教訓、霊的な要点を教えることを意図しているのだ。

C. 人々は、羊飼いについてイエスが何を語っているかは明確に理解していたが、イエスが伝えようとしていた霊的な要点は、人々には見過ごされていた。

1. 6節は、ファリサイ派の人々について、彼らがイエスが語ったことを理解しなかったと述べている。
2. 彼らは、羊や羊飼いについてイエスが何を語っているかは理解していたが、イエスが示そうとしていた霊的な応用を見逃していた。彼らには霊的な理解が欠けていた。イエスが伝えようとしていた霊的な教訓を見分けることができなかったのだ。
3. そして、この点は注目に値する。なぜなら、霊的な真理は、聖霊の働きと御業によってのみ見分けられるからだ。
    a. パウロはコリントの教会への第一の手紙の中で、次のように記している。「私たちもまた、これらのことを語っているが、それは人間の知恵が教える言葉によるのではなく、聖霊が教える言葉によるものであり、霊的な事柄を霊的な事柄と照らし合わせて語っているのだ。しかし、肉に属する人は、神の御霊の事柄を受け入れない。それは、彼にとって愚かなことだからである。また、彼はそれを知ることができない。なぜなら、それは霊的にしか見分けられないからである。」（**Iコリント2:13-14**）
    b. 霊的な真理を理解するためには、聖霊の導きと導きが必要だ。**<u>霊的な真理には、霊的な啓示が求められる</u>**。
    c. 人々は、羊小屋や羊飼い、門、門番、泥棒、強盗などについてはすべて理解していた。彼らが理解できなかったのは、それらの事柄がキリストについて何を明らかにしているかということだった。
    d. 彼らが理解できなかった問題は、情報が不十分だったことではなく、むしろ霊的な啓示の欠如にあったのだ。
    e. これは、第9章の終わりにイエスが述べた、「裁きのために世に来られた」という考え全体と結びついている。「見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためである。」（**ヨハネ9:39**）ファリサイ派の人々は、イエスがこのたとえを通して彼らに示そうとしている霊的な真理に対して盲目なのである。

D. さて、残念ながら私たちのほとんどは、羊や羊飼いについて、また1世紀のイスラエルで羊飼いとして暮らすことがどのようなものだったかについて、あまり詳しく知らないだろう。

1. 当時の人々とは異なり、私たちはイエスがここで何を語っているのかすぐには理解できないかもしれない。そこで、皆が同じ認識を持てるよう、私自身の研究に基づいて、これらの事柄について簡単に説明してみたい。
2. このたとえ話には、それぞれ異なる行動をとる何人かの登場人物が描かれている。
    a. 1節で、イエスは、門から羊小屋に入らず、別の道からよじ登ってくる者たちについて語り、彼らは盗人や強盗に他ならないと述べている。
        i. さて、イエスが「羊小屋」について語るとき、それは通常、石で造られた円形または四角形の囲いのことを指しており、その上にはしばしば

岩の上には、羊小屋に入ろうとする者に対する防御の障壁として、茨や棘が生えていることが多かった。

ii. 羊小屋には、壁の中に一つの小さな開口部があり、それが「門」と見なされていた。そこが羊小屋に出入りするための通常の入り口だった。

iii. イエスが、門以外の道から羊小屋に入ろうとする者たちについて語るとき、それは悪意を持ってそうする人々のことを指している。彼らはそこにいるべきではなく、自分たちのものではないものを奪おうとしているのだ。

iv. イエスは、二種類の人がいると語っている。すなわち、泥棒と強盗だ。どちらも自分のものではないものを奪おうとする者だが、その手口は異なる。

- 泥棒は通常、自分の行いを非常にこっそりと行う。彼は狡猾で、夜の闇に紛れて、欺瞞的かつ慎重に行動し、自分自身や羊小屋にいることに注意を引きたくない。誰にも見られず、気づかれずに済ませたいと願っているのだ。
- 一方、強盗は公然と、しばしば力や暴力を用いて盗む者だ。彼らはこっそり行動することなど気にせず、ただ暴力で押し入り、欲しいものを奪い取る。

b. さらに、羊小屋の門から入る羊飼いたちがいる。イエスは、門番が羊飼いのために門を開く様子を描いている。

i. 多くの場合、一つの羊小屋には様々な群れの羊が一緒に収容されていた。特に町や都市の近くにある羊小屋ではそうだった。そして羊飼いたちは、自分たちの群れをこの共同の羊小屋に入れ、誰か一人を門番として任命していた。

ii. 門番は、羊飼いのうちの一人か、あるいは羊飼いたちが町や都市へ出かけている間、羊を見守るために雇われた者だった。

iii. 門番は実際に一晩中羊たちと一緒に過ごし、たいていは門の真ん中に横たわっていた。そうすることで、誰であれ、何であれ、羊小屋に出入りするには、門の真ん中に陣取っている門番をまたいで通るしかなくなるのだ。

iv. 朝、羊飼いたちが羊のところに戻ってくると、すべての羊を知っている門番は、羊飼いたちが自分の羊を呼び寄せられるよう、喜んで羊小屋の中へ通した。

v. そして驚くべきことに、羊たちはそれぞれの羊飼いの声や呼び声を聞き分けることができた。羊飼いが呼びかけると、羊たちは彼のところへやって来て、そうして羊飼いは羊たちを牧草地へと導くことができたのだ。

vi. 羊飼いは羊たちの前を歩きながら先導し、羊たちは彼の行く先を追って、その声に導かれてついていった。

c. もし見知らぬ者が入り込もうとして、羊を自分の方へ呼び寄せようとしても、羊たちはその者とは一切関わろうとしなかった。羊たちは見知らぬ者に従うことはなく、むしろその者から逃げ出した。なぜなら、その者の声や呼び声に馴染みがなかったからだ。

E. これが、羊飼いと羊についてイエスが語ったことに対する、基本的な自然な理解である。しかし、イエスが彼らに伝えようとしていた霊的な真理とは何だったのだろうか。

1. 人々は理解できなかったため、イエスはそれを分かりやすく説明し、ご自身の言葉の霊的な意味を解き明かさなければならなかった。

2. 7〜18節には「**イエスによる説明**」**が**記されており、これを二部に分けて見ていく。第一部は7〜10節だ。7節でイエスが何を語っているか見てみよう。

IV. ヨハネ10:7-18；イエスによる説明；2つの部分

A. 「門」に関する説明（7〜10節）

1. ここ7〜10節で、イエスは再び「わたしは〜である」という宣言を行い、ご自身を羊の門であると明かしている。7節でイエスは、「まことに、あなたがたに告げる。わたしは羊の門である」と語っている。9節は、イエスが「わたしは門である」と言うところから始まっている。

2. 「門」とは、羊小屋への出入り口のことを指している。

a. そこで、ここでの比喩を理解しなければならない。イエスは、すでに存在する羊小屋に入り、自分の羊を呼び出し、そして本文の第3節と第4節に記されているように、それらを緑の牧草地へと導くことについて語っているのだ。

b. 牧草地の外には、しばしばもう一つの小さな羊小屋があり、羊たちはそこに留まることで、近くに潜んでいるかもしれない捕食者から身を守ることができた。

c. イエスは、羊が自分の羊小屋に入るために通らなければならない「門」として、ご自身を例えている。そして、その羊小屋に入った羊たちは、イエスが導き、世話をする群れの一員となる。これらの羊には、羊飼いが導くところならどこへでも、牧草地を求めて出入りできる特権がある。

3. 羊の門として、イエスは二つの非常に重要なことを語っている。

a. 一つは、**救いについて語っている**ということだ。私たちを殺そうとするもの、死へと導くものからの保護である。

i. イエスは、私たちの罪の報いから私たちを守ってくださる。罪の報いは死であることは、誰もが知っている。イエスがご自身を「門」と表現される時、それは、罪の報いから守られる唯一の道がご自身であることを示しているのだ。イエスこそが、救いへの唯一の道である。

ii. 他に道はない。羊が守られるためには、イエスを通って、イエスの群れに入らなければならない。

iii. イエスは後にこう言われる。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない。」（**ヨハネ14:6**）

iv. 使徒行伝4章12節には、「また、他のだれにも救いはない。天の下で、人の子らに与えられた名のうち、私たちが救われるべき名は、この名以外にないからだ。」（**使徒行伝4:12**）と記されている。

v. イエスはこれを極めて明確に示している。御自身の群れに入る道はただ一つであり、それはイエスを通ることである。

b. そして第二に、イエスはご自身を「門」と位置づけることで、**供給についても語っている**。羊たちは、牧草地を見つけ、必要なものを得るために、イエスを通って出入りするのだ。

i. 「門」として、イエスは私たちに天国での永遠の命だけでなく、今この地での豊かな命も与えてくださる。

ii. キリストは、私たちに豊かで御霊に満たされた人生を約束してくださる。キリストが日々私たちを導き、日々の必要を満たしてくださるのだ。

iii. 私たちの日々の必要について、イエスはこう言われた。「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべてあなたに与えられる。」（**マタイ6:33**）

iv. 豊かな人生とは、必ずしも物質的な富や財産に基づくものではない。それは地位や権力、あるいは物質世界における繁栄のことでもなく、誰もが健康で、裕福で、賢いという「繁栄の福音」のことでもない。それは、私たちが主と共に歩む中で、主が私たちのあらゆる霊的な必要を満たしてくださるということなのだ。

v. 聖書は、私たちがキリストにあって天にあるあらゆる霊的な祝福に恵まれていると語っている。（**エペソ1:3**）

vi. イエスと共に歩むために必要なものはすべて、イエスの中に、そしてイエスを通して与えられている。

vii. 私たちが主と御言葉、そして主の御声に従うことに集中するとき、主と共に歩むためのあらゆる必要を主が満たしてくださるという確信を持つことができる。

c. 羊の門として、イエスは御自身の群れに召された者たちに、保護と供給の両方を与えてくださるのだ。

4. 「門」としての主の模範は、主より前に現れたすべての「盗人」や「強盗」たちとは対照をなしている。

a. これには、直接的な文脈と歴史的な文脈があると思う。

b. 直近の文脈は、間違いなくイエスの時代の宗教指導者たち、すなわち、すべての宗教的礼拝や儀式を監督するサンヘドリンで務めていたパリサイ人、律法学者、律法解釈者たちを指している。

i. 彼らは盗人や強盗の集団だった。イエスは、御父の神殿を清めた際、彼らが御父の家を「盗人の巣窟」に変えてしまったと宣言した。（**マタイ21:13**）

ii. マタイによる福音書23章で、イエスは律法学者やパリサイ人に対して、「ああ、律法学者たち、パリサイ人たちよ、

偽善者どもよ！ あなたがたは杯や皿の外側はきれいに洗うが、内側は搾取と放蕩で満ちている。」（**マタイ23:25**）

iii. 彼らは宗教という覆いを、人々から搾取し、自らの利己的な欲望を満たす手段として利用していた。

iv. 彼らが気にかけていたのは、権力とその維持だけであり、それによって民を支配しようとしていたのだ。

v. つまり、イエスは間違いなく当時の宗教指導者たちに語りかけているのだ。

c. しかし、そこには歴史的な背景もあるだろう。歴史的に見れば、イエスは恐らく、イスラエルの子らの間の偽預言者や、いわゆる宗教指導者たちを指しているのだ。

i. 旧約聖書の多くの箇所が、霊的な羊飼いたち、つまり主の御名をかたって語ったと称しながらも、イスラエルの民を偶像崇拝と罪の深みへと導いた偽預言者たちについて述べている。

ii. イザヤ書56章がそれについて語っている。エレミヤ書23章と25章。ゼカリヤ書11章とエゼキエル書34章にもある。

iii. エゼキエル書34章では、神はエゼキエルにイスラエルの牧者たちに対して預言させ、彼らに災いを宣告させている。彼らは群れを養うことよりも、自分たちを養うことの方に関心を持っていた。彼らは羊から毛を刈り取り、肥えた羊を屠り、その羊毛で身を包んだ。その間ずっと、羊たちのことは全く気にかけていなかった。彼らはただ自分たちの利益や欲望ばかりを追い求め、羊たち、すなわちイスラエルの家の必要や願いについては全く顧みなかった。

iv. その結果、イスラエルの家は地の果てまで散らされた。しかし神は、やがて御自身が選んだ羊飼いを立てられる日が来ると約束された。それは、神の羊を愛し、世話し、慈しむ者である。

v. 神はこう宣言された。「わたしは彼らの上に一人の羊飼いを立て、彼に彼らを養わせる――わたしのしもべダビデだ。彼は彼らを養い、彼らの羊飼いとなる。そして、わたし、主が彼らの神となり、わたしのしもべダビデが彼らのうちで君主となる。わたし、主が語ったのだ。」（**エゼキエル34:23-24**）

5. 羊飼いについて語ったところで、この節の第二部である11〜18節の「イエスによる解説」に移る。私が聖書を読み上げるので、皆さんも自分の聖書を開いて追いかけてほしい。

B. 「良い羊飼い」に関する説明（11-18節）

1. ここ11〜18節で、イエスはまたしても「わたしは〜である」という宣言を行っている。イエスは羊の門であるだけでなく、良き羊飼いでもあるのだ。11節でイエスは「わたしは良き羊飼いである」と述べている。14節でも再び、「わたしは良き羊飼いである」と述べられている。

2. 良き羊飼いとして、イエスはいくつかのことを行われる。まず第一に、イエスは良き羊飼いとして、羊のためにご自身の命を捧げられることについて語られる。これはもちろん、カルバリの十字架におけるイエスの身代わりの死を指している。

a. イエスは、弟子たちにこの点を決して見逃してほしくないのだ。この数節の中で、イエスはご自身の命を捧げるという事実について、何度か語っている。

i. 11節では、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」とある

ii. 15節では、「そして、わたしは羊のために自分の命を捨てる」とある。

iii. 17節では「わたしが自分の命を捨てるから」

iv. 18節では、「わたしが自らそれを捨てる」と「わたしにはそれを捨てる力がある」とある。

b. イエスは、私たちがこれを確実に理解できるようにしているのだ。良き羊飼いであるイエス・キリストは、私たち、すなわち御自身の羊のために、進んで御自身の命を捧げる。御自身の血によって私たちを贖うためである。私たちは代価を払って買い取られたのだ。そして、その代価とは、神のひとり子である御子の命であった。

c. ヨハネ15:13には、「友のために自分の命を捨てることほど、これ以上の愛はない」とある（**ヨハネ15:13**）。キリストが私たちのために進んで命を捨てられたのは、まさにこのことである。

d. ヨハネの手紙第一3章16節はこう宣言している。「私たちが愛を知るのは、キリストが私たちのために命を捨ててくださったからである。」（**ヨハネの手紙第一3:16a**）

e. ローマ人への手紙5章8節には、「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことによって、神は私たちに対するご自身の愛を示されたのである」と記されている。（ローマ5:8）

f. それゆえ、何よりもまず、良き**羊飼いであるイエスは**、**羊のために命を捧げ**、進んで彼らの代わりに死なれたのだ。

3. 第二に、良き羊飼いであるイエスは、羊の世話をしている。

a. 12節と13節で、イエスは「良い羊飼い」としての自分の行いと、「雇い人」の行いを対比させている。雇い人は羊を所有しておらず、イエスのように羊のために代価を支払ったわけでもなく、羊のことを気にかけてもいない。困難に直面するたびに逃げ出すのだ。捕食者が現れると、彼は自分を守ることにしか関心がなく、給料のためだけに仕事をし、それ以上のことは何もしないため、逃げ出すのである。

b. 一方、イエスは羊を大切にする。イエスは羊のそばに留まり、捕食者から羊を守ってくれる。迷い出た一匹の羊を探し出し、安全な場所へ連れ戻すのだ。

c. 詩篇23篇は、私たちへの配慮や、私たちが心配する必要がないことについて語ることで、私たちの良い羊飼いを描いている。偉大な詩人ダビデはこう宣言している。「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私は悪を恐れない。あなたが私と共におられるからだ。あなたの鞭と杖、それらが私を慰める。」（**詩篇23:4**）

d. 私たちには恐れる必要はない。なぜなら、私たちの良い羊飼いがどれほど私たちを愛し、気遣ってくれているかを知っているからだ。彼は決して私たちを見捨てたり、離れ去ったりすることはなく、常に私たちのそばにいて、導き、導き、守ってくれるのだ。

e. こうして、良き羊飼い**であるイエスは、御自分の羊を慈しんでおられるのだ**。

4. 次に、良き羊飼いであるイエスは、ご自身の羊を知っておられ、また羊たちからも知られていることが分かる。

a. これは親密さを物語っている。関係性を物語っているのだ。イエスは私たちを知っており、私たちを名指しで呼んでくださる。そして、イエスとの関係が深まるにつれて、私たちもイエスについてますます深く知るようになる。

b. これは宗教や儀式、規則や規定の話ではなく、関係性の話なのだ。イエスは私たちを知っており、私たちにもイエスを知ってほしいと願っている。

c. 実際、イエスは御自身と御父との関係を、私たちに望んでおられる関係に例えている。御父を知っておられるのと同じように、イエスは私たちにも御父を知ってほしいと願っているのだ。

d. それは、私たちのほとんどが夢見るだけの親密さだが、それでもなお、イエスは私たちにそれを望んでおられる。イエスはそこにいて、毎日、私たちに、そして私たちを通して、ご自身を現そうと望んでおられるのだ。

e. 私たちがすべきことは、ただ忠実に主の御声に耳を傾け、御言葉を受け入れ、それに従うことだけだ。そうすればするほど、主との親密さと親しみは深まり、この人生における主の導きや指針をより容易に認識できるようになる。

f. そして、良き羊飼い**であるイエスは**、**ご自身の羊を知っておられ**、私たちにもイエスを知ってほしいと願っておられるのだ。

5. 16節を見ると、イエスにはこの囲いには属さない他の羊たちがおり、彼らもまたイエスの声を聞いていることが分かる。

a. ここで理解すべきは、イエスが当初言及していた「囲い」とは、ユダヤ教の羊の囲いだったということだ。イエスはユダヤ教の羊の囲いの門にやって来て、その囲いから御自身の羊を呼び出し、御自身の群れへと招き入れるのだ。

b. これは、盲目の物乞いの生涯に象徴されている。その盲目の物乞いはかつてユダヤ教の一員だったが、後に追い出され、破門された。イエスがやって来て、かつての盲目の物乞いを御自身のもとに来るよう招き、御声を聞き、イエスとの関係に入り、イエスが御自身の血で買い取った群れの一員となるよう招いたのである。

c. この新しい群れは、教会全体を表している。イエスが「この囲いにはいない他の羊」について言及するとき、それはユダヤ教の外にいる人々、すなわち、イエスの声を聞いて御自身のもとに来る人々を指している。それは、世界の残りの人々、すなわち異邦人、あなたや私のような人々について語っているのだ。

d. イエスが「一つの群れ、一人の羊飼い」と語るとき、それはキリストの体の統一について語っているのだ。私たち全員が同じ体の一部であるということだ。

i. キリストにある兄弟姉妹の間でこれほど多くの争いがあるのは、私にとって悲しいことだ。驚くべきことではないのかもしれない。ファラーと私は五人の息子を育てたが、彼らはいつも喧嘩をしていたのだから。

ii. しかし、本来はそうあるべきではない。キリストは、良き羊飼いであるご自身の導きの下で、御自身の体が一つに結ばれることを望んでおられるのだ。

e. 私たちが皆、イエス・キリストの主権の下で一つに結ばれていることに早く気づけば気づくほど、私たちの様々な違いがいかに取るに足らないものであるかにも早く気づくことになる。

i. 羊小屋でくつろぐのが好きな羊もいれば、広々とした牧草地で草を食むのが好きな羊もいる。時折道に迷う羊もいれば、丘の上で運命を試すように時間を過ごしすぎる羊もいるかもしれない。しかし、それらはすべて同じ群れに属する羊であり、同じ良き羊飼いの見守る目のもとにあるのだ。

f. 羊はそれぞれ異なり、私たちにはそれぞれの長所や個性がある。一致とは画一性を意味しない。キリストの体における多様性には美しさがある。私たち全員が同じであるはずがない。私たちは皆、キリストという大きな体の中で、それぞれの役割を果たしているのだ。

g. 良き羊飼いであるイエスは、**すべての羊を、**ご自身の世話と支えのもとにある**一つの群れへと招き入れる**方だ。

6. 最後に、17節と18節では、良き羊飼いであるイエスが父に愛され、父の御心を成し遂げている様子が見て取れる。

a. イエスは、自ら進んで命を捨てることについて語っているが、同時に、再びその命を取り戻す力を持っていることについても語っている。

b. すでに述べたように、自ら進んで命を捨てるということは、カルバリの十字架における犠牲的な死を指している。そして、再び命を取り戻すということは、イエスの復活、すなわち罪と死に対する勝利を指している。

c. これこそが、父がイエスに与えた使命であった。罪と死に打ち勝ち、私たちすべてが父と和解する道を開くために、この世に来て死ぬことだった。

d. さて、興味深いことに、ここでイエスが「羊飼い」と「羊」という比喩から離れているように思えるかもしれないが、必ずしもそうではない。

e. 多くの場合、羊飼いは羊の所有者の息子たちだった。父親が羊を所有し、その息子たちが羊の世話をすることが多かったのだ。

i. これは、アブラハム、イサク、ヤコブといった族長たちの場合もそうだった。ダビデが父イッサイの羊の世話をしていた時も同様だった。

ii. やがて、息子が父の羊を忠実に世話していると、父は特定の羊を息子に託し、自分で世話させるようになる。そうして息子は、父の群れに加えて、自分自身の群れを築き上げ、育て始め、最終的には父の群れを相続することも多かったのだ。

f. つまり、イエスはここで必ずしもこの比喩から逸脱したわけではない。イエスは使命を与えられ、父からこの世に来て、羊たちのために命を捧げるよう命じられたのだ。イエスは進んでそうされた。

g. そして、父は御子を愛している。それは、御子が来て命を捧げ、再びそれを取り戻すという自発的な意志によって、

私たちと父とが和解する機会を創り出し、私たちが神の群れと家族の中に迎え入れられるようにしたのだ。

h. 『ヨハネの手紙一』4章10節にはこう記されている。「愛とは、私たちが神を愛したことではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪の贖いとして御子を遣わされたことにある」（**1ヨハネ4:10**）。父は、私たちへの愛を示すために御子を遣わした。そして御子は進んで来て、父の計画を成し遂げた。

i. こうして、**イエスは御父の御心を成し遂げる「良い羊飼い」**であることが分かる。神の小羊としての召しを自ら果たし、私たちの代わりに死ぬために遣わされ、その後三日目に墓からよみがえり、罪と死に打ち勝ち、私たちが御父と和解するための唯一の道を備えてくださったのだ。

C. さて、ここを締めくくるにあたり、19〜21節の**「イエスをめぐる分裂」**について扱う最後の節を見ていこう。

V. ヨハネ10:19-21；イエスをめぐる分裂

A. イエスがたとえ話を語り、その後に説明を加えた後、人々の間にはまたしても分裂が生じた。

1. 以前、第9章でかつて目が見えなかった物乞いが連れてこられた際、ユダヤ人たちの間には意見の対立が生じていた。ある者は、イエスが安息日を守らないのだから、神から遣わされた者であるはずがないと言った。またある者は、「罪人である者が、どうしてそのようなしるしを行うことができるのか」と言い、彼らの間には分裂が生じていた（**ヨハネ9:16**）。

B. そして、ここでも同様の状況が見られる。

1. ある者たちは、イエスが悪霊に取りつかれていると非難し、イエスが狂っている、正気を失っていると示唆し、なぜ彼に耳を傾けるのかと疑問を呈した。

2. 一方で、イエスの言葉は悪霊に取りつかれた者の言葉ではないと主張する者もおり、やはりイエスのような者がどうして盲人の目を開くことができるのかと疑問を呈した。

C. イエスに関して、私たちが認識し理解しなければならないことがある。

1. イエスは常に分裂を引き起こす。イエスは善き羊飼いであるが、同時に**全人類を分かつ大きな境界線**でもあるのだ。

2. イエス・キリストに関しては中立など存在しない。あなたはイエスの味方か、敵かのどちらかだ。もしイエスと共にいないなら、あなたはイエスの敵である。

3. ルカによる福音書で、ルカはイエスの次の言葉を引用している。「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うか。いや、決してそうではない。むしろ、分裂をもたらすためだ。」（**ルカ12:51**）

4. 結局のところ、この世界は二つの単純なグループに分けられる。キリストに味方する者とキリストに敵対する者、救われた者と救われていない者、信者と非信者だ。あなたはどちらか一方に属する。

5. あなたは、良き羊飼いであるイエス・キリストの下にある神の群れの一員か、あるいは他の囲いの中に閉じ込められた羊か、あるいは単に野原を独りさまよっている羊かのいずれかだ

。

6. 良い知らせは、イエスが私たちすべてを御自身のもとに来るよう招き、御自身を通して御自身の群れに入るよう招いてくださっているということだ。私たちはこの世の囲いの中に留まる必要はない。イエスは私たちすべてを御自身のもとに来るよう招き、良き羊飼いとして御自身に従うよう招いておられる。

7. そして、もしあなたが主の声を聞き、ただそれに応え、主に従うなら、主は愛に満ちた腕であなたを御自身の群れに迎え入れてくださる。祈ろう！